

テンパス



TEMPUS

2005年(平成17年) **23**号



もくじ

願泉寺本堂前の銅灯籠の解体

願泉寺本堂の建築年代について

貝塚市郷土資料展示室

企画展2「タイムスリップ! いずみの国の弥生時代」

平成17年度展示会のお知らせ(11月~3月)

企画展3「貝塚市内の神社と絵馬」のお知らせ

歌仙絵馬の歴史

古文書講座

古文書をひも解く

貝塚寺内領主ト半家と大名・寺院との手紙

貝塚市歴史展示館オープン



展示室Bは、昭和天皇の貝塚工場訪問のために応接室として増設された部分です。内装や照明は当時の雰囲気をもつままに今日に伝えています。

◆◆◆ 願泉寺本堂前の銅灯籠の解体 ◆◆◆

現在、願泉寺では、半解体修理事業がすすんでいます。本堂の覆屋建設に伴い本堂前に東西一対で設置されていた銅灯籠の移動作業が行なわれました。

灯籠はクレーンで吊るされ、解体されたのち、本堂の修理工事が終わるまで別の場所で保管されています。

灯籠をクレーンで吊り上げると、灯籠を支える芯柱が、刺し立ててありました。今回の解体時には、芯柱の下部はすでにシロアリなどにより朽ちていましたが、東灯籠では、朽ちた芯柱の代わりに新たに丸材を芯柱として用いていました。

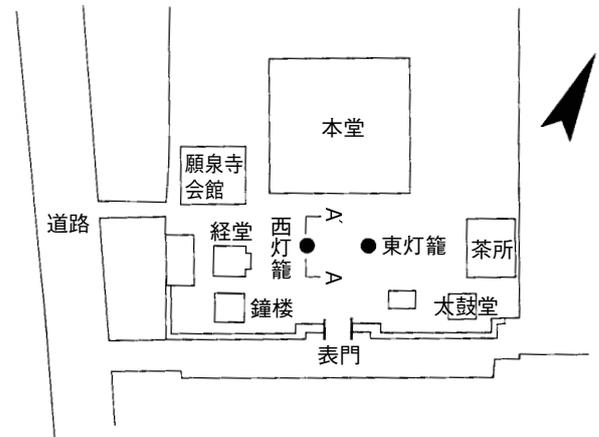
灯籠内部は、火袋（灯火を入れる部分）から竿（円筒状の長い胴部分）、基礎部分にかけて空洞になっており、その中には、小石、砂利が多量に詰まっていた。灯籠の竿内部において芯柱を固定するために小石や砂利で充填していたとも考えられますが、そのほかに櫛、木片、コイン、プラスチック製玩具、おはじき、貝殻、陶磁器片などが混入していました。これは、灯籠の火袋部分から物を内部に入れていたものと推測されます。こどものいたずらでしょうか？

灯籠の解体・移動に伴い、灯籠基礎の下において埋蔵文化財の調査を行ないました。東・西灯籠の基礎の下は、芯柱を設置するための穴（柱穴）を掘っていました。

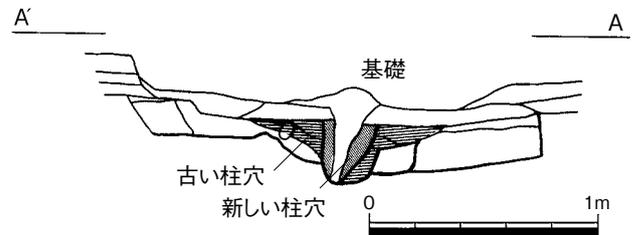
東・西灯籠の柱穴は、直径約1.7～2 m、深さ0.5m、埋土は褐灰色粘土、暗灰黄色土などを主体とし、瓦片が数点出土しています。

西灯籠については、灯籠を再設置するために芯柱を抜き取り、この柱穴を埋め戻した後に、新たに柱穴を掘って芯柱を立てていました。

東灯籠においても、芯柱の痕跡が残っていました。



願泉寺境内略図



西灯籠の柱穴断面



願泉寺本堂と灯籠



東灯籠撤去のようす

◆◆◆ 願泉寺本堂の建築年代について ◆◆◆

願泉寺では、本年9月から本堂の半解体修理がはじまりました。このことに関わって、文献資料にみられる本堂の建築年代についてご紹介します。

現在の願泉寺本堂は、今から342年前の寛文（かんぶん）3（1663）年に再建されたものです。この寛文3年の再建については、前年の寛文2年7月付の本堂建立寄付金の記録である奉加（ほうか）帳（右写真）3冊が願泉寺に伝わり現存しています。この奉加帳は、寄付金額と寄付者名が記載されているのみですが、貝塚寺内の5町や近隣村落をはじめ、堺・大坂・京都・江戸など合計1,724人の名前が見え、寛文の本堂再建についての同時代史料として唯一のものです。



寛文2年の願泉寺再興造立奉加帳

また、この本堂再建は、寛文2年5月1日、畿内をはじめ、丹波・丹後・若狭・美濃・信濃・肥前にまで被害をおよぼした京畿大地震の被害復興だと考えられています。この地震被害を直接記した記録は残っていませんが、当時の住職ト半了周（ぼくはんりょうしゅう）の後室（こうしつ）である養周院（ようしゅういん／備前国岡山藩家老池田利政の娘）の消息（しょうそこ）に、備前の信濃殿（実弟の池田政信）から地震見舞いの飛脚（ひきやく）が到来したなどの京畿大地震の記事が見えます。なお、この京畿大地震では、亀山城、篠山城、彦根城をはじめ各地の城が崩壊し、滋賀唐崎（現在の滋賀県大津市内の地名）では倒壊家屋1,570戸、京都市中でも倒壊家屋1,000戸を数えたといわれています。

さて、願泉寺の本堂は、寛文3年以前にも3度再建されたことが記録にみられます。1度目は今から455年前の天文（てんぶん）19（1550）年で、この時は本願寺（ほんがんにじ）第10世証如（しょうにょ）より阿弥陀如来（あみだによらい）の絵像「方便法身尊像（ほうべんほっしんそんぞう）」をさずけられて、それをまつる草庵を再興したとされます。2度目は今から428年前の天正（てんしょう）5（1577）年織田信長の貝塚攻撃のあと、同8（1580）年に再建されたとされる本堂です。3度目は今から407年前の慶長（けいちょう）3（1598）年に建立されたとされる本堂です。しかし、この3度の再建については、同時代の資料は現存せず、江戸時代の記録に記されるのみで、いずれも伝承の域を出ません。現在、本堂は屋根瓦を解体中（右写真）で、教育委員会が行なっている瓦調査で16世紀末期の屋根瓦を検出していることから、慶長3年の再建は史実の可能性が高くなっています。また、以前に行なった建造物調査において本堂内陣背面に慶長3年の前本堂の柱が転用されていることが指摘されていますが、くわしい状況については現時点では不明です。今後解体作業とそれにとまなう調査がすすんでいくなかで、記録にはあらわれない本堂の歴史を明らかにできる新たな資料が見つかるでしょう。それら新たな成果につきましても、今後のテンプス紙面でも随時とりあげていきます。



本堂の屋根瓦解体のようす

企画展2「タイムスリップ! いずみの国の弥生時代」

本展は平成17年9月3日(土)より10月16日(日)まで開催しました。本展では、石才南遺跡や土生遺跡など貝塚市の弥生時代の遺跡を中心に、泉佐野市の檜井西遺跡・三軒屋遺跡、泉南市の氏の松遺跡・男里遺跡、阪南市の下出北遺跡・向出遺跡といった泉南地域の弥生時代の遺跡から出土した土器や石器などを展示し、弥生時代における泉南地域の状況を展示紹介しました。市民のみなさんはもちろん、多くの方々に市内外からご来室いただき、447名の観覧者数を数えました。

展示期間中には、第73回および第74回かいづか歴史文化セミナーを開催しました。9月4日(日)には奈良大学教授の酒井龍一氏による講演会「楽しく歩こう弥生の時代-泉南から北部九州まで-」を開催し、考古学の成果などをもとに地域の拠点となる集落や日常の生活圏などの情報を収集することで「弥生の地図づくり」を行なうという弥生世界へのアプローチ法についてご講演いただきました。また、10月9日(日)には天理大学助教授の桑原久男氏による講演会「泉南と大和の弥生時代-池上・曾根と唐古・鍵-」を開催し、大和地域の拠点集落のひとつである唐古・鍵遺跡での調査研究成果をもとに、池上・曾根遺跡との比較から、同じ畿内であることから和泉と大和の弥生時代がよく似ていることを指摘いただいたほか、弥生時代の都市・政治・祭祀についてもふれていただき、風土記などの文献を利用した銅鐸や弥生土器に書かれた絵画の解読方法についてもご講演いただきました。



平成17年度展示会のお知らせ (11月～3月)

○企画展3「貝塚市内の神社と絵馬」

会 期：平成17年11月24日(木)～平成17年12月22日(木)

内 容：貝塚市内の各神社が所蔵するさまざまな絵馬を展示紹介します。(次頁参照)

○「貝塚の指定文化財」展 (第Ⅲ期)

会 期：平成18年1月7日(土)～平成18年1月22日(日)

内 容：貝塚市指定文化財の紹介展。

○特別展「ぼっかんさんの平成大修理-重要文化財願泉寺本堂他5棟半解体修理成果報告Ⅰ-」

会 期：平成18年2月4日(土)～平成17年3月26日(日)

内 容：平成16年7月から始まった重要文化財願泉寺本堂他5棟の半解体修理にともなう各種調査の成果等を展示紹介します。

※特別展期間中の2月17日(金)～3月1日(水)は市民図書館の整理休館のため休室。

※11月2日(水)～13日(日)は貝塚市民図書館「手づくり紙しばい大会」展示を開催します。

※上記以外の期間は展示替えのため休室。

企画展3「貝塚市内の神社と絵馬」のお知らせ

平成17年11月24日(木)から12月22日(木)にかけて、上記企画展を開催します。

神社やお寺に奉納されている絵馬には、それを奉納したひとびとの願いがこめられています。絵馬には文字通り馬を描いたものをはじめ、神社やお寺にお参りするようすを描いた参詣図絵馬や三十六歌仙や百人一首などを描いた歌仙絵馬など図柄もさまざまなものがあります。本展では、貝塚市内の神社が所蔵するさまざまな絵馬を紹介し、今につたわる絵馬のすばらしさを見ていただくとともに、絵馬にこめられたひとびとの願いや本市における神社信仰の特色にふれていただきたいと思います。展示では、王子・南近義(みなみこぎ)神社、久保・阿理莫(ありまか)神社、沢・八品(やしな)神社、脇浜・高麗(たかおがみ)神社の各神社が所蔵する絵馬を展示します。ぜひ、この機会にご覧ください。



高麗神社参詣図絵馬・高麗神社所蔵

また、展示期間中の12月18日(日)には第75回かいづか歴史文化セミナー「高麗神社・八品神社をたずねて」(現地見学会)を開催します。詳細は市広報11月号、ホームページなどでご確認ください。

かせんえま 歌仙絵馬の歴史

ここでは、上記企画展において展示を予定している絵馬の画題のひとつでもあり、三十六歌仙図絵馬や百人一首絵馬に代表される歌仙絵馬の歴史について紹介します。

歌仙絵馬は扁額歌仙絵ともいい、その歴史は三十六歌仙の成立にはじまります。三十六歌仙は、11世紀のはじめ、藤原公任(ふじわらのきんとう)が具平親王(ともひらしんのう)と、紀貫之(きのつらゆき)や柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)の歌について論じ、『三十六人撰』という書物を編集したことにはじまるといわれています。三十六歌仙絵がいつごろ描かれはじめたかはわかりませんが、鎌倉時代以降に、歌道の隆盛と肖像画の発展をうけて盛んに描かれるようになり、やがて左右十八番に分けて描かれることが多くなっていきます(例えば、南近義神社の三十六歌仙図絵馬でも「左 柿本人丸」、「右 中納言朝忠」というように記されています)。室町時代になると、歌仙絵を絵馬に描き盛んに神社仏閣へ奉納することが行なわれました。こうした絵馬は、神を敬う想いと歌道上達の願いをこめて奉納されたものと考えられます。江戸時代以降には、三十六歌仙のほか、百人一首を描いたものも盛んに奉納されるようになりました。



三十六歌仙図絵馬(柿本人麻呂)
南近義神社所蔵

こうした歌仙絵馬を奉納することは、和歌や連歌などが盛んだった貝塚市域でも行なわれており、上記企画展においては、南近義神社の三十六歌仙図絵馬や高麗神社の百人一首絵馬の一部を展示紹介いたします。

古文書講座

◆「願泉寺と貝塚寺内②—大名との交流と贈答—」

平成17年8月20日(土)から5回にわたり、「願泉寺と貝塚寺内②—大名との交流と贈答—」と題して古文書講座を開催しました。

平成16年度より進めております、願泉寺の本堂等重要文化財建造物の半解体修理がはじまったことに関わって、願泉寺に残る古文書をテキストにしたもので、今年度3期にわたって「願泉寺と貝塚寺内」を共通のテーマとして取り上げる2期目の講座です。

今回の講座では、江戸時代において、貝塚名物として珍重された「水粉(みずのこ)」や「干鰯(ひはも)」などの贈答について、各大名との書状のやりとりを解説していきました。「水粉」は麦の粉のことで、砂糖とともに水に溶かし、夏の暑さを和らげる清涼飲料として用いられていました。また、「干鰯」は鰯を干したもので、魚は塩漬けや干物に加工されて、日持ちするようにして遠路運ばれました。

その中では、紀州徳川家との結びつきを示す多くの書状や、将軍へ献上された品々に対して老中から出された礼状などを取り上げました。それによって、貝塚寺内の領主として他の大名や将軍家との関わりについて、古文書を通して参加者の皆さんとともに検討することができました。

参加者の方々には、今回実際の古文書(現物)に直接触れていただき、テキストからでは伝わらない和紙の手ざわりや厚み、大きさなどを実感してもらうことができました。

また、参加者の方々から寄せられたアンケートには「貝塚のト半家は将軍家から高く評価され、交流があったことにおどろきと誇りを感じました。」といったご意見をいただき、皆さんにとっては身近な「ぼっかんさん」が将軍家と交流があったということを新鮮なものとして感じていただきました。



◆次回(第21回) 古文書講座開催のお知らせ

「願泉寺と貝塚寺内③—宗教と政治のはざま、本願寺と寛永寺—」

江戸時代に入ってから、教義上の本末関係にあった本願寺と、4代目了周以来代々剃髪得度した寛永寺との関係に注目し、願泉寺が宗教的に政治的にどのような位置に置かれていたのか、史料から読み解いていきます。

日 時：平成18年1月7日-初心者講習、1月14日-第1回、1月21日-第2回、
1月28日-第3回、2月4日-第4回、いずれも土曜日午後2時～4時30分

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

申 込：必要事項(住所、氏名、電話番号)を明記の上、はがき・Email・FAX・
電話いずれかの方法で、下記申込み連絡先まで事前にお願ひします。

申込み連絡先：〒597-8585 大阪府貝塚市畠中1-17-1 貝塚市教育委員会 社会教育課
T E L 0724 (33) 7126 / F A X 0724 (33) 7107
Email shakaikyoiku@city.kaizuka.lg (エル・ジー) .jp

古文書をひも解く

貝塚寺内領主ト半家と大名・寺院との手紙

今夏の古文書講座「願泉寺と貝塚寺内②一大名との交流と贈答一」で紹介しましたように、願泉寺文書にはたくさんのお大名からの手紙が残されています。ここでは、時間の都合上講座で取り上げられなかった寺院との手紙のやりとりも含めて紹介します。

残された手紙は約千点あり、時代は江戸時代の初め頃（17世紀前半）から幕末にかけての約250年間にわたります。手紙の差出人は、約3割が幕府の要職（老中・若年寄・寺社奉行など）で、古文書講座で取り上げたように、江戸時代に貝塚の特産として将軍家へ献上した「水粉」や「干鰯」に対するお礼を将軍に代わって述べるという内容です。

それ以外の手紙では、近隣の紀州（和歌山）藩主からのもの（初代頼宣（よりのぶ）、2代光貞（みつさだ）、6代宗直（むねなお）、7代宗将（むねのぶ）、9代治貞（はるさだ）、14代茂承（もちつぐ））と、附家老である安藤氏・水野氏・三浦氏やその他の重臣からの書状も残されています。内容は将軍家へも贈られている水粉・干鰯などの贈答に対する礼状や、8月1日にお祝いする八朔（はっさく）の挨拶といった内容のものが見られ、紀州徳川家との親交の深さが見てとれます。

大名家との交流では、ほかに岸和田藩主岡部氏や、鳥取藩主池田氏（家老荒尾氏）などの家からの手紙や、堺奉行をつとめた大名（常陸土浦藩主土屋氏）との手紙が確認できます。

寺院との交流では、興正寺からト半家に嫁いだ「なか姫」や「充姫」に宛てて出された興正寺27世華園撰信（はなぞのせっしん）とその息子澤馨（たくけい）・澤超（たくちょう）の幕末・維新期の手紙が100点以上残されています。

また、宗教的な側面からは、寺院として本末関係のある東本願寺の家臣粟津元晴（あわづもとほる）・粟津元好（あわづもとよし）や西本願寺の家臣下間仲潔（しもつまなかきよ）からの暑寒の挨拶などがあり、本山との強い結びつきがうかがえます。

このように願泉寺にのこる手紙は、江戸時代に取り結ばれたさまざまな人々との関係を知る貴重な史料であり、今後の研究の進展が待たれます。



華園撰信から充姫への書状（寒中見舞としてト半家の人々の安否を尋ねている）



下間仲潔からの書状
（願泉寺から届いたお歳暮の
塩鯛に対するお礼）

貝塚市歴史展示館オープン

平成17年10月1日(土)、テンプス22号でも紹介した貝塚市歴史展示館がオープンしました。展示館は、「東洋の魔女」と称され、昭和39（1964）年の東京オリンピックで金メダルを獲得した全日本女子チームの中心となったニチボー貝塚の誕生の地、貝塚市半田に位置します。展示館では、貝塚市の通史展示「貝塚市の歴史-近世から近現代まで-」と、回転レシーブを生んだ旧体育館の床板やさまざまな関係資料をもとにチームの誕生から東京オリンピックでの金メダル獲得までを展示した「ニチボー貝塚バレーボールチームの軌跡」の2つをメインテーマに展示を行なっています。ぜひ一度お立ち寄りください。

貝塚市歴史展示館（貝塚市半田138-1）

電話番号：0724-31-0500

開館時間：午前10時～午後4時

休館日：毎火曜日、祝日、年末年始

入館料：無料

交通手段：JR阪和線「東貝塚」駅下車徒歩5分



お詫びと訂正

平成17年7月31日発行のテンプス22号5ページ『貝塚市歴史展示館オープン』の記事で「昭和35（1960）年秋に開催された第3回世界バレーボール選手権大会でソ連を破り世界制覇を成し遂げ…」とありますが「昭和37（1962）年秋に開催された第4回世界バレーボール選手権大会」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

かいづか文化財だよりテンプス23号



平成17年10月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市島中1丁目17-1

Tel (0724)33-7126 Fax (0724)33-7107

Email : shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 (株)和歌山印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67.20円